慈悲
和歌色葉集

哥縁起　作者畧傳

辰
二

土岐文庫
文庫17
W43
1

文庫 17
W43
1

ゆめのあと

昭和六十年二月一日
寄贈

010185195126

早稲田大学図書

松宇文庫

和歌威徳集上之一

如山信士出洛のゆふまぐれ月朝の縁井誦経せんとて雲林院に詣く待きゝ此寺の堂の前にてうちみて頭をさる殿上下肩を待ちて門前なる車を見しめさ堂内の男女へしをするに簡所内よろうさしかへて神のちかひはありてこれいへくなくかへてうらくる雑行する寺よ高山とさ云ようめれる入道の眼勢よつゝうしきれるかと渭濱波をかかゝて

こゝに老翁のはなしをきゝしをかりつと年
来れ得意ともかいかりしより不思議作能を
隙してさ後くのむかしと細さひの
ありし入道の云ますらく作しきこと
行かさむかしからのわかれ好色世房
七八廿常合のらことをそへて若きとも
家集となりけて叙捨と飾るといふとれ
なりしかく勲功を深作富とつて
此道よ名をかつさん筆點しとおもめて
其詞よ略なるん人ある判詞へと恐す下

委ちかいは識とまねなく歌とうろひは詩入
衣は身とすく躬とかりしてなうくはよを
のれ仏と念し理とよりて色とて境生
とかくさし作かつて堤大和詞りつきを失ひ
出雲の八重雲みよなかつて無なる趣なる
ふをいまもくさのすて果て名のかれし
ゑとなれと山河の詞いやしくて野
中のしかはなれぬ名かしは谷の埋本
人もたつきぬ志の彩ひのやさしさ
人ことよのあかれぬありろさんのわきめ

うれよのゝまうて福ゆかりあるのゝえをさる
象のおくよとかつて志賀のと及すさ
そわくしわ川まの中面にひさかたやさ
うらのく海ゆうしなく山のかの清水
うの川しうれハ津守のうしあしきうは
卯へのうちやまうれわりてあるくさ乃
紅にれくえさの方のうまつけ侍るぬひ
わりとたいかきんな小車のめくきしうと
表のかい山田のくもくも志ふりすまいふこ
となしにたかんとくへ侍しというふ　老翁云や

さしくもわかなきさ捨ゆへのつくしく奥のこ
ゝろことかゝふまさき波をこえてなひく
素懐をとけむとこそ許容あらハ哀不便とて
すこれうつらめか若冠ハとものゝ宰相の親験
なれ詠作をとみのひともかくも狭師なれひ
うとし和布のなか縁とさハ宗そ門
弟の末弟よきんとしとつゝふよ入道念仏を
とて綺語を嫌せかりとこつよ罪の基ちかなわ
又文籍と離て胸臆よ稿ハ頗積年なれと
辞丁うれ老翁云世俗文字の業狂言綺

雑談をなりゆきとも讃仏業の因狂言綺語の縁
ならば咲やさまよつきなし昔の大将皆ゆかし
給ひつらんよ情わかちなき翁は何黙せん且
一隅をしめして志川るよ三怖を和を見守
憤特せしく口綺空しくしとやふ入道云
南初とかりひ出てくなくうせ給ひてや
六十餘まては求学せしかとも已二千年計
いり言をきこへけと頷とふうにわれならよ
平まてて云讃仏積あてうさかまへ癈
志てまかのこうむれ極の綱よ任て肝要

の庵をかけつらせてしめてすむるに
入道云息て云九句先老管見久寿ゟ今
こもゑ年の歌詠題志こぞろうし
遵守師とまいりかゝ棒持とおつむる君云
儀の趣をきゝしへ句の趣やさんよ不審
相にかくは宏才よ文よく聊は笠扇とも
て粗方の要を挙むーよは和歌の縁起二
よは猶くゑこてよは避病の次弟口伝は讃仏
の肯趣ゑよは撰ねし時代六よは名誉歌
紀七よは通用名誉八よは雑歌 会釈

是ハ和哥の万葉ニ剖作ト申なハらハれ
とまたひさつわおハらしえとえんりのう

和歌万葉集

一和哥縁起者

夫和哥者是此朝之風俗なり天地開けて
より日本我也天神地祇の代よハ露句
もさとすさわろうと出雲八雲之時
よ始而詞をそのつく積ミく続まして種と
しゐ出来りて言えあり伝わされハ此道
あるあり也めるを万葉集ハ代あわ起れ
みかりしして来の人顛を源よりひろく
し古今集ハ詞ゆきしくかろくして今世よ

いろくを流とうたがひなし先此古今
序に此暦十代数百歳といへるハ平城四年
嵯峨十四年淳和十年仁明十七年文徳
八年清和十八年陽成八年光孝三年宇多
十年醍醐十代数凡百歳や第七年の古
あり十三年のうちもわか撰集のなる
十年よとしひろかや出つくさかし和
とささうし筆をなしむきいふとなへて
すなかれ句とうて一首とし本一字を体
とせりめ七めの句いなりまて七の句宗や

初の句をいふ頭とし第二句ハ胸とし第三を
腰とし残の二句ハ尾なりとなしはらをさ
れたる事僧のくなあわハ六係八品をとれ
ハ四病とさうへし風賦比興雅頌を六條
いふなりわは六義のことろと貫之かいあわ
るゝ紙
風ハ是を押よりそへくるを係とさるし
むきいそへるとつふかわたいからさきぬ尊
ときへはまる前
難波津よさくやこの花冬こもり

今と云てことやこの花
二賤ハ秀句なり秀句ハ狗(?)をつくせハつくせ
いふて後なれハ賤といふて斉なり
さく発にはひつくのわらされさ
身よりてはこのはるも走てすく
三段ハなすしへ斉と云なりはとれなしつと
しむ物よしくへよてすなり
実にきさおしまの密のにおさていおれ
こひしきここよ瀬やもうさむ
守奥ハ則ちゆらへ斉とぬふなりわれは是と

ぬきくへて奥をぬきくへしむなり
秋らひいまむてもつきしわわるろくこと
ら後のさしささえたすみ帰てとても
歌とえいたぬくられとの筆なりおほに
くさえしられいわわのまくよつふ之
いつわのなし紀世なりせいうりなり
人のこりの案られしろまし
六頌と云ハ漢をあけなしなりなかむる
祝のことなれいもひ斉とつふなり
はまのいむつもとみならさきつさの

三階よりも上殿つくりせり
といへるたくひ以上の字は六衣裳を
さしきめて其一字の字なれとも絹よひかれ
て其二三四字もあり
ゆきのうらは甚いさしに作り常みきれ
梅月今やさくらん
花あらいのちらいさりやすまとんさるもの
とりわかれんといへるかん
かのくさまの月の月影よめくらら
おもしろや山嵐の風

文字をこえんとて文のしなとこ文字を
ありそふるなり
梅花きれいさもこえもく久堅（ひさかた）のあさくさう
空のかんて山わらひ
冬ふかは玉河泉よわけなくむしろのくさも
なくさて酒わかれん
いそあら弱いてつくゆきさまちそ山
給ろん摘とって給てよん
仁徳やまてむしろくいなそちようけて
わすれつわそ

二種々名并若

凡哥の髄脳家々よまれてさまさまの

すかたさまさまの名もあり短哥と云是

卅一字の哥なりしかるに末二句を定てつきや

れ云なりけり此短哥とはまさに長哥といふ

名もありけりしめと二字つらねいひを世

いけり

八雲立ゝ出雲八重垣妻こめに

八重垣つくるその八重垣を

長哥といふハ短句をかさね〇なかき字も

なくいひつらねつゞきてながくよめるを云へ

旋頭哥といふハ五七七の詞のつゞきにむすびかれ

て三句つらねかへしていふを云か故なり

旋頭のよしハめくる例の哥を哥と云なり

反と云訓をいかなるふうにむくてまむなり

旋頭哥とすべて文字ハ同じとよむそふきえ

けむくといひてひなふりとも云なり又古今

の序にハ例卅一字の哥を反哥と云と

こゑさらハ此長哥に五七々とれ混本ハ又

せめのつらしもありくつくよきんにくまれて

よくしらぬ人とも初の三句とかきし歌の
二句とは末まで卅一字并一首あるべし
とい人あれども古今并なに必志もあれ
ば世のすゑよ人のて葉の名といつはりて
五七こ二の并すもとりの二句とは必七字
よまむつきなりし五七こ二の字の数するは説
とよめる并
うけまくもかしこくれどもいんまくも
ゆしくれたあするむうしこぎれてもなく
かきのあきにうらのうしうくもらうけきの

ひてうたさうといふうられまさしまさきの
河ふらにいかにえそておそふ山さびまち
まちてわめの花てさくろひとさかまれも
ともしく
五七五のすゑうよ長歌とよめる并
もしあられはさこめてとりわみとどう
つせうのせのことりも花つなきつわくわ
おはくのきうけどるぬのあれはさい
河まよふ花よ繁みたちろへておる
さはひまくこしてなりゆけれ

次一句略之
うへのはなにひかされてなくなむ神
志のふよよする波の志きなみしいけり
とおもの(?)ゆふくときこえつる玉碎(こまかに)の道
ゆきすかよふうまれも天雲のゆきすち
うつてきまりひぬおかなうみ表裏をとけ
ろふ葛もうつ川ゝうなそもつれかさ
う経つうくわらかして乱句の許をつき
営のういその律の時るひとわりもも
しまう父よ似てもなりしと志つら母よ似む

なかりしに卯花のさけるが中へわりなくひ
くゝわされさとよましうちなれ花を
志らくひかりしとよなきをいふにより
なひせんさくなりそ歌との魚橋よ
何をされとそ
いはゆる父母の二句とは歌前中なる旋頭(せんとう)
前中の句とは人もあるべし旋頭歌といふは
うた頭をもむかうへよりとかへるといふは
昔まへつくるを云昔神代に八句さきまう
さかりと出雲八雲の縁より吹一字ついかて

綴る句の体を揃るにはあまり時は六句の
羽を用て前の体に似されはうくにいろいろ
云えされは古今の序には旋頭とよう換
頭といふもうたよみくりといふ縁よりく
濱成の式には此哥を双本となつけ双本
といふもまたなりぬといふいはれもとれも
これ前よくるむなわ或人旋頭いわみよ
くるとかとあるも旋頭のくにいつるとみ
なりとしてなりふと混本のかよひめくと
云縁よりもくつるか不審ゝ胸にも腰よそ

旋も七字五字をもそふる故なり胸七字と
名づくるよしありける哥
萩の花をはなくずはな撫子の花
女郎花又蘭槿乃花
混本哥といふは本よりひろくともし
もといはひめくくといふもむつかしき
上の句の末一句とのそきて四句よなと
つくすなり句もさくめぬ前よ似たると云
なりされは喜撰式には意趣相同として旋頭
哥一とは混本哥とも名付たり七字ある字

これも又ゑまうせてのそく下一句との
そさくくよめる哥
秋かのうちけましとちかゆとき
花のまそらし
折句の哥といふハ五文字ある詞を句ごとに
の上におきてことたまへといへる哥
ことのはもときはなるをはたのまなむ
まつをみよかしへてはちるやハ
小野小町か筆
ことの葉ハとこなつかしき花をると

なへての人にしらすなよゆめ
沓冠の折句ハ十文字ある詞を句ごとの
上下におきてよむ也天暦の帝広幡
御息所にあはせたきものすこしと
とよせ給ひける
あふさかも果ハゆきゝのせきもゐず
尋てとひこきなハかへさし
をみなへし花すゝきと置てよめる
こゝは花すゝきをさかさ句にすへて
をのゝ萩みし秋に似ずなりぞます

なをおやなきありしこと
畳句(でつく)と云は○て同字をよむなりと
ときくよくかしうねこゆゑなり
ひろきんいえうかうろかなれ
ものおくやうころなかわ
誹諧体といふはいろいろ利口の奇なるも云なれ
おかしき奇説ある人のされごとなれ
ありうちくなり
秋の野をなにめくるめてうとなし
おれもし　歌もひとくさ

戯嘆体といふはあいなれども調なき歌
ようはきにもちひのきことをきらふ
なり
あしきも戯れ作る歌の田とえしうせ
かきられてうたかよせか
不着体といふはれもひとむら不なく
されはかてなにとなくいふかや
ままもこうひるひまわたるすかうれ
さとその牛のうつのえのうさ
廻文体といふはおかうきにはおわうし

さうさまにもてなしまいらせてさへ
せしむまさきのなへりけれなりけれは
かえそしもたんなのさくにさらん
譬喩哥といふハぬきしほよりうく
なりしところにてよめるおもひと袖よませて
つくしふかき
由機高清古のあくひのまうハみえ
登ハききえて袖とさそけりし
相聞哥といふハ恋のうたと言客に逢
てよそにてひとまれなりける

家をひいゆく名もありけてもおし
わふとうちそてわめけりて
挽哥といふハ哀傷のうたなかりけるを
来て去人をいふ心をひゝかせる
世にありけるまかりしにたりふ人
かのさきらかおもしもなきよりるね
隠是といふる哥ハ袖の名をとくすんおり
その心をやしる隠是ると
くさもえもされをそわけたるかせかい
わらひもののこやしうくとめん

謎言といふ言はなりふりもやさしとさらハなく
かゝぬさせんひとをたすでえほかあらわれたる
鼠の家より○つゝうひとさとちかて
むきうかりてるとうわりてかへり
鼠の家ハ穴なりけるに○つにつひよこなり
さうわりてすハ穴ならバ何といふは口なれハ
かれこひしていふんことわかすくまりめ
説ん細袖より世袖衣袖とて紅蓮寺なる
もありし一首あるもありの隠題といへるハ
これなれどかゝるうちもかりそく袖絵は是

うむなるへしより世袖絵といふなりこれ袖よりそえ
つてまうとなるより世袖絵といふハ是を袖に
よせつくまり千なるか笑よりくるのゝつるの
のあやしきわとつられあハやよりくなかる
のりあやつハ川くしうさいゆきなれハ初
雪を川らなるも袖絵といふハ絹を
多てありし百かり十五日の念仏の字さし
とつるハ十五日ハちなるか念仏ハおきく仏
なわ阿らく仏とゑさしゐれハすらかと
つらえ云たと云こゑハ名ぬるひいくもし

しても句ごとに同し都にて終の字にひて
例なり
つゆもひとつにまとふみゆふ
すゝしさにかへてつき
ともなへしまいきりつゝらし
かゝ波かうなやたぬ川へし
けふ立春の都よ入へくハなきれてまへ人
のミするを定なれいなそく抽絆の
きにさる年もわつて志らせやさむて
て詞の次よりかなれともれしくあることなん

わるてし文字ふさわしとつふ抱もこれもわ
なそくへれミせり初の句のはての字を
次の句れへをしてつきをふふりて次第よ
いひのへつさゆるなわせ文字め文字への心
よまりせぬなり
晦のかわ○ころよ明の秋達の露のき
の下草よなし云ゝにかくさくる山まれ
なとられすわもなしとつきくさろなら
為り
甚つハ例の句よとなくりついひくさるんか

末句にちらせしかは秀句ハ無用なり
行く山よりゆらく春のさゝなみとなれ
句と禍極にまつる縁りなれかのミ
やうくしるらんと末の句と貫之は
らかなり霧のけゆらさらひてすきとられ
と末句と同防内侍かひかりに花や咲
紅葉やすらんおなし川なれと此句を秋実
ハ付たり
三避病次第者
方をとりし熟ハ病とさらくし三病をも遭

まらくはまされゆかは第一第二此句の初字
の同ハ岸樹とてくとゝ忌なり
秋の霧のかゝるもちるすかなしみの
露しと物やられしらさらん
第一第二の終字同も頭尾の病とていふ
いへしとなり
棹弓紅葉ひとつえとすへてこそ
とこそをかすそこすれそよりに
本末二句此始の字同ならと最縁の病とて
てきらわれたり

白露もしくれもいたくもる山ハ
下紫のこらす紅葉しにけり
此末二句の縁字何さとも色青ゟ紅と
てせいすれとむかしの名ミのよこれもれる
これら筆にあらはされぬへきにや
一字つゝ八字にまふきハ縁すきぬへん
かとへて句ミ花と見のきん
又句の末なりし紙花詞のすゑにあるハ同
文字なれハ耳にさハりといふなり
歌のれハ縁ハあしくぬとなる歌

なりひもちてまさりてきこゆれ
此歌のきハのえ文字と縁ハれハこころへ
かたの詞をいるむしも有りしにや
うち縁のかくれ○いもの名さもつき
ハ同さこの病とそ古式にハ中々同じの
病とハ一字もかなしう縁ともきれ
なしさと様に病とすへし
ひさうさきのけハすれ○ゆゑも
○のまへ雲も立まさりかな
藻汐今そなきさしんさよすれる

ミミ付の鶴のうゑさうくなり
山とりよりて文字とりふには疵之満と云
も汁も猶一流之文字の疵とりふ筆は上古
よなきうれをと一字も同と定来りむ
なるべし
あけもてぬいのち納まの頭つら
うき筆しきく思ひもしれ
ミミふつひとりさしまうせ文武の
本下家様は每よまされず
あけもてぬのねもふ文字なり思はすの

すも不文字なりの見さふみ気のともけや
ミうさのこも彼なれいのそくつきこうく
云人おまるあれども云人も仰れとい
う我く筆よ此況天德の比奇合よ源順
うか
我ゐよてまくぬ其の容儀よ
ますうらそけぬうそひすのうゑ
てよめるは今その心さめなくて勝う
なかまくて文字は誰なし仏も大心劍よ加ね
是は疵といせまことそ髄惱よいやしなう

今さんこそひしうかに至月の
みな明の月とまち出つられ
ミ山よりまい川の雪くに消なくよ
うつりこいのへの巻なつむなり
月次(つきなみ)の月と定の月とい制なりなり都と文
うやまでもよ文制なりけるなし司の寂
とりゆしといふくいなりわなれても同し
つ同銅のこわるとつさむなり
さりさらん捕といなりはさくる哉
れのつけかりもまくらさいらん

此言寛平(くわんぺい)何言合よらんの字二ありとて病
ある言のよきさめくきなり
わふまてとせめて気(いのち)の打しされい
こひらそんの命なりなり
此言なえの何言合よ文れの字二あれても
その沙汰(さた)なくてうちよえわされい言乃
ゐみけよしらして古くい勝負(かちまけ)まけるや
をまたいつこあつか実よ耳よゐらてさ
こえまにてもさるへぬき
田錦作ら題而　付令次ヶ及言板く

大かた常にもしるしたりといへども見るにさて
手爾葉といふ時ハかはる詞をうけるへし
發句のうちにも句をもちてゆかしくとゝまり
なかし句のするとすゝむにうしと
きなれとつくつく能いつれもやや
さしくかなくきすへれとろきめつし
其外てには是るる色々く難ハすてく哀よ
月にハ夜なくきやうに雪ハゆくおもし
うく露ハ身よく人をうれしなゆつ
つゝがなく恨ハつらくむかしく歎ハいかゝ

らるしく創ハはしく候ハめてさめくさ
ものひよむへきなり文字結句起字にも文字や
文字又文字もすへる字あり足る字あり
うしく其外落花庭露滋といへん
是よハ中の字とおの字となり是を宗と
する字を一字とするハ 本ノ二 そなハるへき
ハ旅宿富源見書窓といへん是よ涼字
増の字となり文詞をまハしてよむ へき
さして 本ノ二 といふ事也謂秋夜氣如雨逢語
思切とおもん是よハ如の字と切の字とと

名ことに云つきし詞とおもひよまれけると
もて行くなりいにしへより暁天鄭谷山谿
鹿苑とおなじ是よりは鄭谷鹿苑とかなり
總じて百首の題も半是も景物とうさる
へし述懐など題はすべきをされなく
字ゆゑふうさ云ふといへるは是に於て流云
てさせるかしなくふるひさめてはさ不
無下に事うさるありもしとからと申して詞も
ともに高向をもしてこて詞をもするにおよ
さく又古来の歌仙にも皆達磨は歌を読まむ

よろしく天性をうけずんばわか野々達磨を
宗とすべからずよく詠むとなく詞をれ
詠ておのづから一すぢよみとをすべきぞ
後の錦の莫才判の綱よ云ひいやもすも
すと学をするひて絵師の心のうちもとをつく
てもつるさの末の道をさましもしも
他流をよるむよはおもそろへしもめ
ともあけうちなるむれにもせにもて実
ておくもきこゆるするたんなへされ
ゐぬとくつい在中将の月やあらぬてよみし紀貫之

かゝるよにあるといひとききうやうなる志
とゞめられしうき寺のすゑにいとの思ある
つし頭胸腰むあわされと人よ多と人二十
いふ詞中をとられあわてもこゝろとかく
まりしてあつからむひよむつしいやしさ
人なれどもたりふ派とろにかゝめらし
ことなる人のためくすかなわ二十いなさひ
源ゟすでも承の名物の名を覚と姆
親ひよむつしむりこうし拝ても紙あり
さてかあるめの人よこころのとられて

あちつゝ親くろくし二十八才覚へかく
唯詞つるひめつしく名にさもてきここえて
あひくしくよむつし紙す覚かるさも
のもとめするやうなわものゝひらう文
それい人をおひていふしろやうかる中よ
承むよのうてそまよ多くとなる古の
先達の中背の上前も云ひおりやよ名と
のむ筋のあかゝるやうなそて覚之り
附文よをとへ名うをあ
風吹いたるる河よゝ浪たる田山

我宿にや忘れむとおもふらん
家なからん末の世にハ者とゝまりまし
しを中務ハ伊勢か子なる者
津国のながらの橋もつくるなり
今ハ我身を何にたとへん
清原の深養父かをのれ孫の元輔ニ而
とハ山端よりのめといつわるる者
忘やしてこゝろかはしはせし袖
神やうけてもなかはよろかれ
四條大納言公任の和歌九品と定て上三品

の中よハ忠岑か歌を入られ
春たつといふばかりにやみよしのゝ
山もかすみてけさハ見ゆらん
躬恒か家集に有歌の中にも順氏の
須経のかめぬましたる歌
住江の松を秋風ふくからに
声うちそふる沖つ白波
此二つのうけ玉ハのあまりのたかさハ
舞けるし歌人の錦の帽子志たる天人鋭
琶となりし紫檀の胴鳥をさして鶴と録

しらふきこ洮宅志ゐる姿あなれば此人は
むかひてあひしらひ伴へるさへ家になくて
みめて自讃し給ひるゝ所
沖津風ふきひらくしな作られ
れのこまんとあらぬきてなく
此ほの弁とらきて出るとき儀式これの会よ
ハ三句二字四字の二極あり かならし宗祇院
多る羽翼れ其なかにて竹契巡年と云れ會
よ読性ある大殿ハ三句四字よありそうせざ
此例もなくよりあり三句四字ハすゝれ

こゝろ三句とい九字つくもうらき文臺へ
とく〜しきて文臺よとくるよ概くれ作
法あり此を披講するよ辞まの次弟あり
一和哥の會事
先文臺を置て亭主の前よとく次文臺
よ向て講師會席と号ね次作者各合のと
文臺よちく亭主のまへよむかへて下﨟よ
てゝ置へし次前座の一二の人を講師下と
して下﨟壊紙を講師とも次講師家
者ようらきをとりうら◯て読その中の

一通を文臺にをしきてよく披見あるべく
講の方のかしらをおきて講師によみて
もらふに講師これをとりてよく〳〵吟ずべし
かならずあらためず白ことにこゝろゆべし
よみをとりていへば人によりてそのれいをのべ
詠せし人の同音に三返詠て後講師方の
こゝろ文次の方をもて下﨟をはじめて
しも上﨟をかはりて七行あり次第にの
ありし後女房其座に可講之式一覧云作
以下女房は其後位ありて以文臺におくべし

於下講之　私云　綱源の令にいふ下﨟より
とりて只わかれて一首によむ一ト
各出自余の者頗耳聞之不可講詠又講師
はかりよみあげて自他の方一切に不詠吟之
女房の時には一首の後次第の如しといへども
よむつゝ若於禁中にはまた上に上卿
制家者読つの方講語人題の中より被出
て着席のうへ咲之可賜之際并着座
新早贊之段并講師同位勧之更に
上みく読同教返講して講師ハ

尚一二篇乃後ハ院家親王家准之
可知
一読書題ハ
假令公家ニハ春日同詠翫花言志應
製和哥一首ト云々官位姓名ハ假實ニ
之至御製者詠ト許つゞくる也
題ニハ云ハ年ト編次ヘし若又和歌
ニ秋夜月對月待友應和哥一首ト云々
官名ニ如例九題同者可読訓也
但如三月盡九月尽ト者非ニ限也随之

斟酌せよ式人云公家ニハ官位署名様ニ
四日位なきの人ニハ官位姓朝臣名ト云
書へし凡民ニハヘ官名ハわゞく倍上
の字をハ不書者院ニハ應製或ハ奉院后
宮親王ニ應令と親王大臣家ニハ
應教と可書私の所ニハ荒涼ニ應教
と不可書云々
一〇膳題ハ
うるはしきいひけしきあるをくら
ゐもとゆけきれおかしき詞乃

こゝろなきを宵とは落花落葉部
よハ花ハ末のゆゆるこゝおもてくよかひ
りこちハ庭のうへよりろさうかなるを
勝なる叢しかむこゝふハたとうふ斗
宵とすなかなる沢せ人の声よくを
ゑる声めでくし底ハ妻こふしかもむを
勝るる鳴さるふとつ心かうちそこゐる
あか几月も雲も是よハ未まてひまさ
世も人も不なよるべし
一所周寛筆

出是以後ハ起居出入すへからず思案ありきを
こらしかく吟詠すへからす若酒宴ある
ハ殊の外のあぬめよ斟酌すへからと宗匠
秀逸をえらてまつるより称嘆すへからと
九宗の草懐ども左右のみ称誉すへから
ともぬとひ早く続ていふかた上臈宮ま
いまくらりといハ沈思ニま色とおもて徽誉是耳
を誹せよ彼是生ずるむ時ある筆を記て
所去続やまとしんらぬめハさいめて是よ
ま一つ又くさる花号の九ぎ周布はなれ

らん家つくりぬるにひとつき句をとえておさうる
的哉とてをきまゝわりて着かとゝのへつて下りは
まらせて云へる句のうちにてもおもしろからんとおもふ
もひとつの人をしとるれむとてもけるにそれ
らすめつらしからぬ句とてもちかく撰ばれざるは
先達のいましめなりけり当代の己ゝとゝりかけり
僻ごとは古哥の多き思ふかりは老よりは思ふすることとも
一遍上人の事
着披論語は是をかくせとかゝるゝ定家和哥
許とおそれむる人云古人说ゝりは披論語は遍家

人着文ぬてをのととをらうには是如実のく
うゝしきのとをよみわろうにも是如実のと
鏡ぬ聖をわか後きりの山ちる法師なとは調
より三会ゝよも是如実そうさ不知案内
の論師は第二番人ならう後の言のと是如実
又後ろの思はぬ云ゝ

和歌呉竹集上之三

一可返事

枕言の返言のといふは言のよ讀ませすへし是
返をいはすして無三界あり一よくいはゝ和の人へ
和の人へしとゝつゝはた言へ内心よあてゝさ
うらしと云なり

恋しさはいれなしむよあつゝとても
と宵の月を忘るゝさうめや

とよめりけれは返しに

さやかにもとうくへき月を恨みて

酒よりすゝむ時それおかうろ
こやりきをうんとなる
二よハ鸚鵡返しといふハ歌の詞をとへし
てはまねをして返しなりあふむといふ
鳥ハ人の詞をいふにまね○ゐぬうんとする鳥
なれハうれよぬきんでていふなり
我たりし人を思ひねむひとく
家おりふ人のまねをとりね
て德ぬらんよ
たり人の思ひていくよおもかえん

思ひねをそしれたりふかしと
とゑ返しとてさうらし
三ハ返ハ返歌之体といふハむかしよき歌を思
ひて詞おもしろき返しとなり
あたなりと名にこそたてれ桜花
年にまれなる人もまちけり
といひけるかへしに
けふこすハあすハ雪とそふりなまし
消すハありとも花と見ましや
とよめる也

是とてもわかちもせぬ人の歌にはさは
かやうなるやすらかなるあるへきん
とてひとつもなく
知らぬ何かはやめくまさていはん
ていわけのこそし歌へかなはれ
こゝろえはくしてあらさうて詠すへ
きことなれはこそいかにへきさらぬ〆
初てこゝろ歌の道に入ぬ輩は知たるとて
ていふところかくもよふくかりして詞と
まりてゐつるなり

五撰抄時代者　付私集口傳物語

平城天子勅にて万葉集を撰せらるゝ
雖然(かんさ)をいはゆうてやまとうたくといふ集
なれは素盞烏(そさのを)の如らの人皇十二代にて
万の時よ代あつりきは万葉集とおなり
大同年中の時代よりはじめ詔し給ふを
橘大臣諸兄とせし後となりしやうなれは
なりの帝とは世は聖武天皇れ中年と
時代おほよそとすこしよしり年とも云
人もあり延喜の天子乃勅よて古今を

撰せられ紀友則貫之躬恒忠岑撰ひき
て平城以後のいにしへ延喜までの今な
世には古今和歌集となづく千首廿巻也
さらに又天暦之帝の御代に後撰集
を撰せしむ之猶順能宣望城時文をそ
作りて此等之人々は梨壺の五人なり
古今の後に撰すれは後撰といふなり
花山院の代より拾遺集を撰しむ後
撰の折をもらへは拾遺集といふなり
多しその後はいかなれとも其餘道済り

撰といふ拾遺抄は此集を清書抄之作
者なり白河院の天治に沙汰ありて通俊後拾遺
を撰して奉らるされと中ころ同太上法皇
俊頼朝臣に仰せて歌をあつめ給ひし
金葉集といふなり崇徳院之治天下に此
歌又よみぬへくくらもあつめ給ひし
臣もめくわそして十四人歌をあつめてまつる
鄭衆の百首の和歌あつめたると女と石
次よて殿上乃艶書の御会あり崇徳院の
仰よく左京大夫顕輔歌を撰せしめり

めくゝ詞花集となん付給ふ同院の御よく
三の仕きめしたる十四人の百首あつめ製
の百首あり二條院の時大夫進清輔續詞花
集を撰して勅定とありけるが後白
河院の時俊成入道に千載集をえらはし
て院宣と申ところ松集打聞髄脳口傳
把翫大納言師頼撰ありし名ならぬ憶良
が類聚歌林師氏海人吉良天神菅家万
葉小集濱成和哥式摂政家豊蔭喜撰法師
が孫姫式見安髄脳宇治殿撰の式六條中

務王宮の六帖源順が樹下集麗花集とて
侍りける人のよめる歌ともきこえし在中将の
伊勢物語滋春在次が大和物語宇治大納言
濱松中納言狭衣の大将山蔭中納言のある
王子海人の若く紅葉れうの硯破宇治橋
姫住吉源氏世継ともいへるなる物語ども
しるものとやいへる十体道済が十体濱成が歌式
が枕冊子然国が古今集六人が仙傳深
宗が秘集今玉集和哥九品和十番和漢朗
詠上下冬雑撰髄脳論俊頼國枕に

公任大納言撰並給ひてかの十の番に定られに
くらかりの雑後拾遺といふは経信卿の談を
侍道経大納言の母かけりかの日記讃岐典
侍の書ならびに堀河院日記良暹と念肖か打
守伯母江侍従隆慶法阿闍梨隆源か口傳并
権守の歌にて後葉集新撰和漢朗詠相撲
立の時并二十番新撰狂六人か基俊朝臣
書や教長卿相拾遺古今和哥集抄花息
三位高重家抄きし撰親隆の元輔一りし
其あわ又のかきといへりとはもな書して

苑原会催さし修野山木髄脳云々又は髄脳と
號して法橋入道とかのるい大江大和国
通親とうしふか詞花集と称し人の為に
かの後葉集きくを號しかの清輔朝臣記
奥儀抄一字抄龝林初学抄袋草紙選の
今撰集とかの清輔のしきさなり落
書の十の番あかり號子敦頼か現存集
敦頼の子敦中の續現存 俊恵の歌合
我かた號ゑの撰又俊恵か并菟玖波抄安位
入道時光拾遺苑宮の河野利気顕昭の言

家集鏡なとあり又安寒玉集加茂神主重
保か月詣集浅持寺入道勝命歌千載
師光か嵯峨月集是光坊已講宗延か山科
集明辰か三井集大和公経円か山月集
侍従俊兼利集覚寛審前濱春花集卿公か
仁和集静縁か閑林集寂然か百法門釈
教百首抄康頼か宝物集覚盛か三十六
人十八番詠信か大原集大史法眼宗円か胸
月集鏡なる法眼慶算か狂言集なと有る
元僧正か玉花集なり又今世の人く

かひろひくさわつめるいか様の坊ひの花の
ゆかれて句つくりこし哉人ゝ右所拾遺
目かな記草所抄良基集醉難歌集歌集
叔鄭聚同異抄家々の集あり会一両々乃
今にかゝ隠之ともあはらて雖書欲
六名誉なる仙者
集あるは入ぬるなるといふめるとも
家ともへうちくらい四百五十七人なかの国王
貴女の此中歌ま僧下の君より人の口よりわ 本ノマヽ
ゑみ出いはやかくれかりしと

帝王二十四代 付東宮院号一人

仁徳天皇

應神天皇御子母ハ后宮大宮中号大

鷦鷯天王

仁賢天王

履中天王御孫市辺押盤御子

天智天王

舒明天王御子母后皇極女帝天智

諱葛城在位十年近江国大津宮

賀郡天智天王御母斉明天王崩天下

系曽日母后諱闘初例也号近江帝又舊城

天王又田原天王大化十年土成十二月三

日二崩五十八歳号天命開別尊持統天皇天

智第二皇女天武后天武天皇元明天皇女

帝同第四皇女草壁王子天皇皇極天皇斉明天王

皇極皇祚也舒明天皇后後

聖武天王

即位孝徳天皇有間王子

文武天王御子母后ハ藤原宮子

平城天王

桓武天王御子母后ハ内大臣良継女

陽成天王

諱貞明在位八年清和第一文徳天

王清和天王陽成院天暦三年九月

九九月落飾入道御母ハ皇太后藤高子二条

右中納言長良卿娘貞観十年十二月十六日

誕同十一年二月一日皇太子二歳同十

八年十一月九日受禅九歳元慶六年正月

二元服十五歳同八年二月四日譲位十七

歳天暦三年九月廿九日崩八十一歳天曰

陽成院号二条院御位去

給此院坐故也

光孝天王

諱時康仁明第三子在位三年号

小松帝仁明天王宗康親王継女

田邑帝母贈皇太后藤沢子光孝誕

文徳天王母ハ東親王之天長七年戊降

天王田邑帝同之天長七年二月元服

兼和三正七叙四品同嘉祥三年五月中務

十五年正月常陸太守嘉祥三年貞観六十

卿仁寿元十一一品二歳

六上野大守同十一品四十一歳同

十八年十月式部卿元慶七年正七一品五

四歳同八年正月太政大臣同二月四日受禅

五十五歳仁和三八六譲位即崩

後撰
宇多天王
五十一十一八歳八月三日葬小松中陵
号亭子院母后式部卿仲野親王御
女班子女主小松天王御子

拾遺
醍醐天王
号延喜帝宇多法皇御子母后内大
臣高藤女胤子

後撰
朱雀院
延喜帝御子母后穏子関白昭宣公
女

後撰拾遺
村上天王
号天暦帝同帝御子母后同

桓武天王
才七賀陽親王女才四三号伊豆内
親王

平城天王
阿保親王才三三号弾正尹贈一品
大江音人在原行平在原業平在原
平在原仲平在原棟梁元方右近次将従四上
母斎宮恬子滋春

嵯峨天王
御太子数源
夫至子源
上才二十源融左大臣
正説也

仁明天王
深草帝ト云文徳天皇田邑帝ト云
母八順子小松帝光孝天王弟子人ト云
康親王法名
宮法名法性

清和天王
惟高親王母紀静子名虎女才四
惟喬親王尾帝ト云悟子内親王女才六斎宮
母同
高子
十一身
三
女

[illegible]

中納言
一切経
清和天王
近衛
伊尹
清和
木工頭
納言
守
三
母

大輔女子遣礼門院右京大夫　内麿後長綏子

贈太政大臣真夏日野家祖

冬嗣左大臣閑院贈太政大臣木中左衛門

待贈左大臣長良贈太政大臣基経昭宣公

大臣国経頭大納言正二位蔵伊勢守継子皇大

后従三位号二条后高子母結伊女良

房忠仁公号白河大政大臣又号二五大臣清

昭宣公基経女子太皇太后号五条后宇多

母后号深殿時平本院仲平女子温子宇多

信台忠平小野宮實頼枇杷左大臣

后伊勢侯此宮欲号七条后寛平九七六

中宮昌泰二七廿三皇太后延喜七六八崩

号東三条良相西三条右大臣常行昌泰

三正親薨七十三廿大納言右大将女子仁

明后文徳母順子兼和十一正七女御従三

嘉祥三三四七中宮仁壽四四廿六皇太后貞

観三二廿九入道女子文徳女御

貞観十三九九八崩安子寛子貞観十九閑

二九七中宮元慶六正七皇太后天皇元服

日八年二四出内裡遷二条院寛平八

二崩延喜十年十二月薨六十九天慶六年五月追復后位

詞花 冷泉院

村上帝御子　母后九条右大臣師輔女安子

拾遺詞花 円融院

同帝御子　母后同

後拾遺詞花 花山院

冷泉院御子　母懐子一条摂政殿下謙徳公伊尹御女

一條院

円融院御子　母后法興院関白入道殿下兼家御女詮子

三條院

諱居貞　冷泉院第二御子　在位五年

母ハ贈皇太后超子　東三条入道摂政兼家女

女天延四正三降誕寛和二七十六

東宮　日元服十一歳寛弘八六十三即位

次六歳　長和五正廿九譲位寛仁元四廿九

出家同五月九日崩四十一歳

後拾詞花 後朱雀院

一条院御子　母后ハ御堂関白殿下御女上東門院彰子

後拾金葉詞花 後冷泉院

後朱雀院御子　母后ハ同関白女嬉子

後拾 金葉
小一条院
三条院御子 母后左大将済時女娍子 無即位

後拾
後三条院
後朱雀院第二御子 母后陽明門院

後拾 金葉 詞花 続詞花
白河院
三条院御子 母后贈太政大臣能信女茂子

金葉 千載
堀河院
白河院御子 母后六條右大臣顕房女賢子 関白師実為子

詞花 続詞花 千載
崇徳院
諱顕仁 鳥羽院第一皇子 母待賢門院璋子 大納言公実女 但白河院御猶子云々 元永二五廿八降誕 同六月十九日為親王 保安四正廿八為太子 即受禅 五歳 同二月十九日即位大極殿 大治四正朔元服 十一歳 永治元十二七譲位 在位十八年 保元七廿二配流讃岐国 云十二月於仁和寺出家 長寛二八廿六於配処崩 四十六歳 追号崇徳院

鳥羽院 後白河院 在位三年 第一ノ宮 崇徳院 母待賢門院 第一ノ宮 在位十八年 近衛院 母美福門院 第六ノ宮 在位十四年

続詞花 千載
二条院
後白河院御子 母后贈太政大臣経実女懿子

後鳥羽院
諱尊成 高倉院第四御子 母贈左大臣信隆女殖子 七条院ト申 治承四七十四降誕 寿永二八廿践祚 四歳 同三七月即位太政官庁 文治五年正三元服 十一歳 建久九十一譲位 十九歳 在位十五年 承久三七八於鳥羽殿御出家 法諱良然 同月十三日奉移隠岐国 延応元二廿二日崩 六十歳 或六十一歳 於隠岐国 同五月廿九日可奉号顕徳院之由宣下 仁治三七八改顕徳院可奉号後鳥羽院之由重被成宣

順徳院
諱守成 鳥羽院第三皇子 在位十一年 母修明門院藤原重子 贈左大臣範季女 正治廿五立太子 四歳 承元四十一廿五受禅 十四歳 承久三四廿譲位 同七月奉移佐渡国 仁治三九十二崩 四十六 於佐渡国 ○私曰 後鳥羽院順徳院ソヘ奉次六代也

貴女二十人

古今 後撰 高津内親王 桓武天王御子 嵯峨天皇ノ女九

後撰 嵯峨后 諱ハ嘉智子 仁明天王ノ母 内舎人贈太政大臣橘清友女

古今 二条后 中納言贈太政大臣長良女 清和天王后 陽成院御母 諱ハ高子 母ハ紀伊守総継女 貞観元年十一月大月従五位下 五節舞妓 同八年十二月女御宣旨 九年正月八日平五従下 十年十二月廿六日生第一皇子 六七帝御年十九 十一年二月立為皇太子 十三年正月八日従三位 元慶元年正月三日即位日立為中宮 戒六 六年正月七月為皇太后宮 寛平八年九月廿一日停后位 延喜十年十二月薨 六十九 天慶六年月追復后位

後撰 七條后 温子 堀河関白昭宣公女 宇多天王后 諱ハ

古今 後撰 桂内親王 諱ハ依子 宇多天皇御女

拾遺 続詞 十載 兼香殿女御 源氏 宮師女 延喜女御

後撰 京極御息処 諱ハ褒子 本院左大臣時平御子 宇多女御

同 大将御息処 諱因香子 和泉右大将定国女 延喜女御

同 三條御息処 諱ハ紀子 三条右大臣定方同帝女御

同 同 花 続詞 大斎院 選子内親王 天暦御女 母九条右大臣師輔女

同 拾遺 続詞 斎宮女御 御子女王 式部卿重明親王御女 母十一条関白貞信公御女 天暦后

同 花 四条中宮 御子 三條関白廣義公御女 母中務卿代明親王御女

後拾 三條天皇大后宮 同関白御女 諱遵子 円融院后

後撰 金葉 続詞 東三条院 諱詮子 法興院関白入道殿下御女 母摂津守藤原仲正女 一条院

御女

後撰 千載 一条皇后宮　定子中関白殿下道隆卿ノ御女　母

拾遺 金葉 詞花 千載 上東門院　諱ハ彰子御堂関白ノ御女　母ハ左大臣雅信ノ女　後一条後朱雀ノ御母

後拾 陽明門院　禎子内親王三条院御女　御堂

同 麗景殿女御　康子代明親王ノ御女後朱雀院　女御亦堀川ノ右大臣頼宗女

同 堀河女御　元子左大臣顕光ノ女小一条院ノ女　御母天暦御女感子内親王

千載 北白河大宮　多子右大臣公能女近衛院后

万葉 聖徳太子　親王十八人　付宮　用明天王ノ御子号二上宮太子ト

同 有間　孝徳天王ノ子　母ハ左大臣阿閉倉橋磨女

同 高岳親王　平城天王ノ御子号二真如親王ト

古今 雲林院親王　常康仁明天王ノ御子

古今 小野宮親王　惟高文徳天皇ノ御子　御母ハ静子紀名虎ノ女

後撰 閑院四品親王　貞元清和天皇ノ第四ノ御子

同 兵部卿元良親王　陽成院第一ノ御子三木兵部卿　母ハ主殿頭遠長女天慶二　七九三薨　五十四歳

同 前中納言親王　是忠光孝天王御子

同 式部卿親王　敦慶宇多院第四御子

同 一品式部卿入道親王　敦實同院第八ノ御子

同 上総大守四品親王　竹明延喜帝第二ノ御子

（後撰 拾遺）同大守四品親王　咸明同年帝十五御子

（同）前中書親王　兼明同帝十六御子

（後拾 詞花 千載）後中書親王　具平天暦帝弟七御子号六条宮

（後拾）弾正尹親王　清仁冷泉院御子

（金葉 詞花 千載）延久三宮　輔仁三条院御子

（千載）紫金臺寺二品入道親王　覚性鳥羽院御子

仁和寺二品親王　守覚後白川院御子

大臣四十三人　付贈官

（万葉）左大臣　橘諸兄美努王御息敏達天皇五世孫号井手左大臣

（拾遺）左大臣　藤原長平参議贈太政大臣房前息

（古今）東三條右大臣　源常嵯峨弟五御子

（古今 後撰）河原院左大臣源融　嵯峨弟十二御子源氏母正四位下大原全子於六条河原院摸塩竈浦嵯峨天王仁明天王源融左大臣従一位号河原大臣男女皇女卒十人之内也弘仁三年去辰生淳和天王為子栖霞観大臣山庄也云云兼和五年十一月叙七月正四位下元服月貞観十四年八月叙五月任左大臣仁和三年十一月十七日従一位即位日同五年輦車寛平二年奉政事同七年八月廿五日薨七十歳同廿八日贈正一位

（古今）贈太政大臣　内舎人橘清友参議左大弁奈良丸息仁明天皇外祖

（同）近院右大臣　源能有文徳天王御子

（後撰）閑院左大臣　藤冬嗣右大臣内麿息

古今後撰 **贈太政大臣**
中納言長良閑院左大臣一男
陽成院外祖

古今 **白河関白殿下**
大政大臣良房忠仁公同二男

古今後撰 **三条右大臣**
定方内大臣高藤公二男母宮
内大夫弥益女内舎人勧修寺
家祖良門閑院左大臣冬嗣六男左中将利
基中納言兼輔刑部大輔惟正従五位下正
五下越前守為時源氏作者紫式部勧修寺
内大臣高藤泉大将定国右大臣左大将定
方

古今後撰 **西宮左大臣**
源高明延喜帝御子

古今後撰拾遺 **菅丞相**
右大臣正二位右大将贈太政大臣
正一位天穂日尊天照大神第二御
子出雲臣土師連等祖天穂日命十四世孫
野見宿禰垂仁天皇御宇賜土師臣姓三世
孫身臣行指天王御世改賜土師連姓十一
世孫古人等天平元年六月廿五日改菅原
姓阿波守従四位下宇庭勘解由長官従五
下遠江介侍読古人天平元賜菅姓左中弁
大学頭文章博士冊従三侍読清公長者文
章博士策大内記大学頭冊三木従三刑部
卿是善文徳
和侍読

古今後撰 **本院左大臣**
贈太政大臣時平堀川関白昭宣
公一男

枇杷左大臣
仲平同二男

後撰 **小一条関白殿下**
大政大臣忠平貞信公四男

同 **冨小路右大臣**
顕忠本院左大臣二男

拾遺 **小野宮関白殿**
大政大臣実頼清慎公小一
条関白貞仁公一男

後撰拾遺 **九条右大臣**
師輔同二男

後撰 **小一条左大臣**
師尹同五男

後撰 拾遺 三條関白殿下 大政大臣頼忠 廉義公 清慎公ノ御子

同 同 一條摂政殿下 大政大臣伊尹 謙徳公 九條ノ右大臣一男

拾遺 後撰 後拾遺 堀河関白殿下 大政大臣兼通 忠義公 二男

後拾遺 金葉 法興院関白入道殿 大政大臣兼家 同三男 号大入道殿

拾 法住寺大政大臣 為光 恒徳公 同九男

後拾遺 詞花 帥前内大臣 儀同三司伊周 中関白二男

後拾 詞花 御堂関白入道殿下 大政大臣道長 法興院関白五男

同 宇治関白入道殿下 大政大臣頼通 御堂関白一男

後拾遺 千載 二条関白殿 大政大臣教通 同四男 号大二条殿

後拾 金詞 堀河入道右大臣 頼宗 同二男

後拾 京極関白殿下 大政大臣師実 宇治ノ関白一男

後拾 閑院左大臣 大納言東宮大夫能信 御堂三男 白川院ノ外祖

土御門右大臣 源ノ師房 後中書王ノ親王男

後拾 金 続詞 六条右大臣 顕房 土御門ノ右大臣ノ二男 堀河院ノ外祖

法性寺関白入道殿下 忠通 白摂政関白大政大臣 従一位 法名円観 知足院関白一男 母ハ六条右大臣顕房女

御堂関白道長 宇治関白頼通 母ハ左大臣雅信ノ女 京極関白師通 母ハ右大臣師房公ノ女 知足院 又富家殿 母ハ右大臣俊家ノ女 法性寺関白忠通 後法性寺関白 又九條殿 又月輪殿兼実 母家女房 後京極摂政良経 母季行卿女 安藝

金詞 花園左大臣 有仁 延久三ノ宮輔仁親王ノ御子

贈左大臣　二条師長實修理大夫顕季息近衛院外祖

八条入道大政大臣　實行大納言公實卿三男

徳大寺左大臣　實能五男

中院入道右大臣　源雅定久我大政大臣雅實二男

大宮大政大臣　伊通大納言民部卿宗通息

九條関白殿下　大政大臣兼實法性寺大殿三男

六條入道左大臣　實定右大臣公能息

冷泉左大臣　實房内大臣公教息

後徳大寺左大臣　實定台母中納言俊忠女

行義大納言正三台實八

條大政大臣号ス轉法輪三条一流祖實行

宮木夫實秀男中納言正三位通季西園寺

一流祖實能号ス大炊御門右大臣台能後徳

大寺左大臣實定待賢門院鳥羽院后崇徳

院後白河

二代同母

鎌倉右大臣

實朝台石大将頼朝二男母平

時政女二位尼政子也清和源

氏八幡大良義家義国六条判官為義左馬

頭義朝殿義朝従二位征夷将軍大納言右大

将義朝三男頼朝征夷大将軍左衛門督母ハ

二位尼時政女右大臣正二位実朝鎌倉右

大臣母ハ

同上

入道前大政大臣

台経台内大臣実宗公男

母ハ入道中納言基宗女大

宮中納言通季公実大納言大納言正三台

通坊城丹大臣宗公経西園寺大政大

臣又号二一条嘉禄

年建西園寺

又俗女房傍入道さとえわまへき所

みむしうわ尚世あまく代しこ
これゆゑに時代官位不浮八志
とけなきれとも打わし出ならはく
狼籍きく

倭百六十人

万 柿本人麿

大智天武ノ御時太宰ノ比人云
光仁御人丸讃曰大夫姓柿本名人敢云
丸蓋上世之哥人也仕持統文武之聖朝過
新田部高市之皇子云云

万古 中納言安倍廣庭

右大臣東人息元正御時
養老比人

同 山邉赤人

神亀天平之比人也云或聖武
之時人一説人丸同時云云
桓武平城御時延暦大同
比人

同同 筑前守山上億良

万古 安倍仲丸

孝元天王御太彦命後也倉橋丸
右大臣始也一名仲麿一説内麿
右傳云船守子中務大輔正五位上従三位云
安倍朝臣御息ト云又云大納言朝平男ト云
私曰此両義共以不審也系図不載之又云
従三位朝衡大納言朝平公御補任不見
旁以不足信用元正天王霊亀二年八月九
三月為学生渡唐朝賜姓朝臣嵯峨天王御
宇右大弁宰相藤常継重而被遣唐朝干時
叙朝云此旦不審也自元正天霊亀二
年至嵯峨天王御位之始及百年如何又或
披仲丸遣唐使桓武天王御時云云是又不
審也江談抄三云仲丸讀哥事霊亀二年為
遣唐使伴仲丸渡唐後不帰朝於漢家楼上
餓死吉備大臣後渡唐之時見鬼形于吉備
大臣言談相教唐土事件仲丸依不朝人也
讀歌雖不可有禁忌尚不知欲如何或記曰
仲麿熒惑星分身也降和国輔正道異国
天文陰陽異朝人怖悪之令禁固而遂殺仍
為霊鬼伏之吉備丸渡唐之時見異形教授

天文暦術算計儒書令末朝云仍仲麿除
兼木猶達天文傳其業云陰陽道中安部
氏天文道本
清明先祖也

中納言兼春宮大夫大伴家持卿 天平元己巳生

安丸孫旅人子云大伴宿祢安麿大納言
贈従二位大伴宿祢旅人家持大納言従二
位又名多比等一統天智天王大伴皇子与
多都牟麿黒主夜須良麿私云黙王子之夜
須良麿安丸同人也河内守之従三位中納言
春宮大夫右大弁太宰帥次戴木経又征夷将
軍任延暦四年八月庚刀在陸奥国薨其骸
未葬尤餘月大伴継人竹良等射殺中納言
従三位兼行春宮大夫陸奥出羽按察使鎮
守府将軍大伴宿祢家持

古 少納言源當純 近院右大臣能有男

同 下野守兼斎院長官藤原隂雄 治部少輔真数五男

古今 民部卿権中納言在原行平卿 阿保親王男 天
長三年仲平行
平守平業平賜姓名在原朝臣承和七年正
月蔵人十二月辞退尤月従五下九四十二
月二日侍従十三年正月従五上任左衛佐
九月右近少将仁寿三年正五位下斉衛二
年正月四位因幡守四年兵部大輔天安仁
年二月中務大輔四月尤馬頭三年正月播
六守貞観二年六月近頭八月尤六日左京
大夫四年正月信濃守同月従四上五年二
月大蔵大輔六年正月十六月備前権守三
月八日兼左兵衛督八年正月正四位下十
年五月兼備中守貞観十二年二月十三日
参議五十三尤六日尤兵衛督十四年八月
尤一日蔵人頭十五年従三位太宰帥元慶
元年治部卿十月十四日別当六年正月中
納言六十五八年正三位民部卿仁和元年
按察同三年四月十三月致仕寛平五年薨

同 右近衛中将在原業平
三号弾正尹阿保
親王五男平城天

王王子母伊都内親王桓武第八皇女母藤
南子従三位乙叡女年月月任左近将監兼
和十四年正月補蔵人嘉祥二年正月七日
従五位下貞観四年正月七日従五位下貞
観四年正月七日従五位上九年二月十日
左兵衛権佐六年三月八日左近少将七年
二月九日右馬権頭十一年正月七日正五
位下十五年正月七日従五位下元慶元年
正月十五日左近権中将十一月九日従
四位上二年正月十一日相模権守三年十
月蔵人頭四年正月十一日美濃権守同七
月八卒親王平城第三世正五位下蕃良藤
継女兼和九年
十月賜一品

同 縫殿助文屋康秀

先祖不知実ハ文林縫殿
助宗于男ト云古傳ニ云ク
陽成院御時ノ人又淳和仁明比ノ人仕ニ参河
掾或中納言朝康子ト云
惟喬親王ノ御子

古後 宮内卿兼覧王

古後 右兵衛督藤原敏行

母紀名虎女不比等下
男正一位左大臣武智
麿贈太政大臣任式部卿仍我家三木従三
位巨勢麿式部卿三河守貞作従五位上讃
岐守従五位上林田按察使陸奥守従四位下
冨士丸従四位上右中将大内記右兵衛督敏
行能登藤生之後昔下切縄人也三木正四
位下伊衡哥人也

古 右中弁安倍清行

大納言民部卿安仁男兼
伊与守

大納言源清蔭卿

陽成院御子

古 猿丸大夫

古傳云官姓時代不知之或孫
首ニ云ク用明天皇聖徳太子山背大
兄王号猿丸大夫云号削王祇註ニ云ク天武
之御子弓削道鏡号云云

古後 大伴黒主

仁和ノ人

古 兵部大輔平篤行

従五位上奥我王兼筑前
守

古後 左衛門佐在原棟梁 業平朝臣一男

古 在原滋春 同二男

古後 左京大夫藤原忠房 左京大夫興範男兼大和守

後 右京大夫源宗于 右京大夫正四位下光孝天王一品式部卿是忠親王宗于統古今作者閑院三光院御説如此但帝王系図不載之如何或説光孝天王御孫右京大夫致正子云々致正又帝王系図載之

古後 左兵衛佐平貞文 左近衛中将好風息三子中故号平中

古後 大納言藤原国経卿 中納言長良一男

同 在原元方 棟梁息国経大納言猶子

後 大納言源昇卿 河原左大臣融息嵯峨天王孫

月 中納言太宰帥公頼卿 贈中納言廣相息

古後 右近衛中将藤原俊蔭 中納言有能息

古 参議左大弁藤原菅根 常陸介良尚子

後 中納言紀長谷雄卿 弾正大忠林範息号紀納言

古後 民部卿紀淑望 長谷雄卿男

月 大内記紀友則 紀有友子云 或長谷雄卿末云 紀有朋子云 孝元天王裔云云 大恩信余此余十六代之孫中納言梶長名 虎臣有人喬衛其比有衛右兵衛督興道蔵 人本道兼和比衛行従五上土佐守木工頭 贈之内蔵介時文能書後撰作者之内女子 典内侍古今宗延行廣勝延右今作者兼均 古今作者官内権助有友有朋友則

円 右衛門府生壬生忠岑 右近衛府生木工允 忠衛子泉大将定国

同 右近衛少将源寶 隨身右衛門府生御厨子処定外膳部摂津大目

參議源舒息滿誠天王御後

同 文章博士都良香 都腹赤息

古後 兵部大輔藤原忠行 遠江守有貞息

同同 平中興 内膳正忠望息

後 伊与守大江千古 參議従三位左兵衛督音人卿息

古後 大江千里 伊与守正五位下或従五位下平城天王阿保親王大江音人 少允従四位上式部権大輔千古千里音人 五男

古 參議小野篁卿 參議左大弁号野相公姓八小野敏達春日皇子妹子大徒 守中納言毛人小野臣推古遣唐使正三位 中納言毛野陸奥介従五位下従四位下永見

延喜大将軍三木形部卿岑守大宰大弐筑前守 大弐葛絃道風正四位下内蔵頭母王氏能 書三跡之中之野跡池篁保衡阿波守好古 左大弁此篁者破軍星之化身也ト云 章生弾正少忠大内記蔵人式部少丞太宰 少弐東宮学士弾正少弼義作木経タリ

中納言平時望卿 中納言雅範息

古後 中納言藤原兼輔卿 左中将利基男号堤 中納言右衛門督従 三位彩骨三条右大臣之処二見タリ兼平 三年薨五十七歳

右衛門佐藤原兼茂 同四男

古後 大内記信濃権介小野美材 大内記伊与介忠範息篁 孫 壬卿

後 小野好古 參議大宰大弐兼筑前守葛絃息道風兄

後 肥後権守藤原千兼　山城守忠房息

古 左少左衛門権佐源俊　右中弁唱息

拾 信濃守紀文幹　参議淑光息

越中守平祐挙　越後守保衡息

壹岐守春道列樹　雅楽頭新名宿祢一男云文章博士正六位上壹岐出雲守

大内記坂上是則　大内記従五位下加賀介好蔭男坂上田村丸裔　後撰ノ々ノ名五人ノ之内

治部卿藤原興風　或説下総権守正六位治部少丞号京家贈大政大臣麿三木濱成作和哥式従五下永谷皇后宮亮正六位相模掾道成興爪或説濱成孫

道戊子云々

後拾 左大辨源公忠　大蔵卿国紀息光孝天王御孫

同同 左兵衛督藤原伊衡　敏行息

陸奥守信明　公忠弁息

中納言藤原敦忠卿　時平公三男母ハ筑前守在原棟梁女忠行公国経昭宣公敦忠時平貞信公敦忠卿母始為国経妻後嫁時平公仍実ハ国経之子ト云々

拾 中納言藤原朝忠卿　三条右大臣息母山蔭中納言女号土御門中納言

古 神祇祭主大中臣頼基　前肥後守輔道意遠江守巴良孫

内匠近允清原深養父　房則息備後守道雄孫

後 左近衛少將藤原清正 兼伊予守 兼輔卿ノ息

摂津守大目壬生忠見 壬生忠見本名忠実 忠岑男云云 天徳二

守大目 任摂津

後 内蔵助時文 貫之ノ息

神祇大副大中臣能宣 頼基ノ息 天児屋根子 九代孫常盤大連公 十一

始賜中臣連 本姓卜部也 可多能祜連公

延意美麿 清麿 今麿 常麿 巴良 輔道 糸主 頼

基 能宣 糸主 輔親 糸主 輔経 伊勢大輔 上東

門院ノ女房

後拾 石見守坂上望城 是則ノ息

同 肥後守清原元輔 深養父ノ孫 顕忠 泰光ノ男 云 母ハ筑前守高向利生ガ女 云

肥後守 従五位上

同同 能登守源順 左馬允挙ノ息

拾 伊賀守藤原仲文 信濃守公葛ノ息 或曰常陸介ト云

後詞 丹波守藤原元真 甲斐守清那ノ息

拾後詞 帯刀先生源重之 兼信ノ子 兄兼忠為子云云

清和天皇四条号閑院貞元親王 三木卿 正四位下 兼忠賜源姓 三河守 侍従 兼信賜源姓 左馬助 重之 従五位下 相模守 冷泉院坊時帯刀

後 参議右大弁源等卿 中納言希ノ息 勘解由長官 天暦五年三月十日

薨ス 七十二歳 等ノ御子息

従四位下 淡路守 濟

拾 大納言源延光卿 代明親王ノ御子

同 左大将藤原済時 小一条左大臣ノ御息

皇太后宮権大夫藤原国章　参議従三位先名男

参議大江朝綱　丹波守玉淵息江相公末葉

拾遺　丹波権掾曽祢好忠　先祖不見寛和比人任丹波権掾云云仍号曽祢云云

拾後同　右近衛少将藤原義孝　一條摂政謙徳公四男母代明親王女従五位下或説康平三八六配流土佐国云云

拾後　左近中将藤原道信　法性寺太政大臣息母謙徳公女九条右丞相師輔京極法性寺太政大臣恒佐公為光従一位師輔公九男母ハ武蔵守藤経邦女道信左中将従四位上下正暦

拾後詞　五年卒二十三歳

右近中将藤原實方　侍従定時息小一條左大臣孫母ハ左大臣雅信女貞信公師尹小一條左大臣従一位左大将侍従五位下歌人也定時母三条右大将定方女実方長徳四十一十二於任国卒ス

傳大納言藤原道綱　法興院関白御息兼右大将

後金千　民部卿藤原長家卿　御堂関白息三條民部卿母高明公女

拾後詞　大宰大弐藤原高遠　参議従三位斉敏息

同　従三位大中臣輔親卿　神祇大副能宣息則兼下系図ニ見タリ

同　大納言藤原公任卿　廉義公御息母代明親王女号四条大納言清慎公小野宮実頼摂政太政大臣敦敏早世母ハ時平女三木佐兵衛督佐理能書三跡之内号佐跡廉義公関白太政大臣頼忠母同上号三條権大納言正二位別當公任能書称漢才人撰拾遺抄和漢朗詠撰者一条院御時号四条大納言権大納言正二位右大弁能書母昭平親王女

後千 中納言藤原定頼卿　公任卿息　母ハ昭平親王女　正二位　父孝
有人云

後 伊賀守藤原長能　伊勢守倫寧息

後金詞 筑前守源道済　伊豆守方国息　延喜御後

後 式部大輔大江匡衡　左京大夫重光息

拾千 右衛門権佐藤原為頼　刑部少輔雅正息　兼輔卿息

文章博士慶滋為政　能登守保章息

拾詞 摂津守大江為基　参議斉光卿息

同 但馬守橘為義

後拾詞 式部卿大輔藤原資斉卿　参議従三位有国息　兼伊与守

同同 木工頭藤原輔尹　前大和守興方息　民部卿懐忠養子

同同 対馬守大江嘉言　大隅守仲宣息

詞花 兵部権大輔大江公資　前薩摩守清言息

後拾 出雲守藤原相如　内蔵頭相信息

式部大輔藤原實綱　式部大輔資斉息

同同 春宮亮平経章　伊与守範国息

後詞千 大和守藤原經衡　中宮大進公斉息

後金 大中臣輔弘　神祇権大副輔宣息

後 周防守平棟仲　安藝守重義息

同 備前守源為善　備中守国盛息

同 坂上定成 主斗節博士親範息

後拾 藤原惟規 越後守為時息

後金詞十 住吉神主津守國基 神主基辰息

後金詞 賀茂神主加茂助成 神主成實息

後続詞 加賀守源兼隆 鎮守府將軍信孝息 先孝天王御後

後拾金詞 前讃岐守藤原兼房 中納言兼隆卿息 母関白孫

後十 左衛門尉蔵人源頼實 美濃守頼國四男

後拾詞 三河守源頼綱 同六男

同同同 左京藤原雅郷 津内大臣息 母大納言重光女 三位

後拾 石見守藤原國房 右馬頭範光息

橘則長 前陸奥守則光息

後拾金十 筑前守源頼家 攝津守頼光息

同六之え 左衛門藤原孝善 前長門守貞孝息

河内権守藤原節信

前備前守源兼長 備前守道成息

後拾金詞千 摂津守藤原範長 尾張守仲清息

後拾金 山口重如 河内国人 号河内重如

金詞十 前信濃守藤原永實 前相摸守清家息

後十 修理大夫橘俊綱 讃岐守橘俊遠息 実宇治殿御子

後金詞 前讃岐守藤原顕國 參議兼經息 母ハ弁ノ乳

後拾十 帥大納言源經信卿 民部卿中納言道方卿息 母ハ源ノ國盛ノ女 宇多法王 下ノ式部卿敦実親王 宇多ノ第九ノ王子 或ハ十七 雅信一條左大臣 六條ノ左大臣 重信中納言道方 權帥民部卿正二位權大納言經信 従四位上木工頭 俊頼俊惠

後拾金詞 前美濃守藤原隆經 右中弁頼任ノ息

後拾金詞千 治部卿藤原通俊卿 同ノ二男

同同同 左中弁源師賢 參議資通卿ノ息

後拾 按察大納言藤原實季卿 別當中納言公成卿ノ息

後拾金詞 春宮大夫藤原公實卿 実季卿ノ息 大納言

同々々 帥中納言大江匡房卿 従四位上 成衡息 母ハ橘孝親ノ女 正二位 大蔵卿 太宰權帥 号ス江帥 大江音人千古 中納言維時 従四位上 式部大輔 匡衡 重光 儒 従四位

下式部大輔 匡衡 儒 従四位下 信濃守 成衡 儒 正上 従四位上 大學頭 舉周 和漢才人 匡房 儒 江 才作者

金詞次十 同同同 大納言源師頼卿 堀河左大臣 俊房ノ一男

全詞 神祇伯従三位顯仲卿 六条右大臣 顯房ノ二男

金詞千 中納言源國信卿 同ノ四男

金詞千 治部中納言源雅兼卿 同ノ八男

金詞千 治部大輔雅光 同ノ十男

金詞千 中宮權亮藤原仲實 前越後守能成ノ息

民部卿大納言藤原宗通 大宮右大臣 俊家息

金詞千 左衞門佐藤原基俊 俊家公男 母ハ高階順業ノ女 守源ノ經長 御堂

関白三男堀河右大臣頼宗母高明公女正
二位大宮右大臣俊家母伊周公女従五上
左衛門基俊成卿和哥之師近二条家和
哥祖也新撰朗詠集撰者和漢之達人也大
納言正二位源通正三位成通侍従大納言
通元神人ト云云蹤韓留之長

同々々
木工頭源俊頼
大納言経信卿息母貞朋女
金葉撰者系図前ニ有木工頭

位四

同々上
修理大夫正三位顕季卿
美濃守隆経息

金詞
左京大夫従三位顕輔卿
修理大夫顕季三男詞花集撰者号三
六条ト和漢ノ流贈太政大臣淡海公男三木
房前左大臣魚名紀伊守贈太政大臣総継
泉通倫前守正四位下真通出羽守従三位時明下
連浅大蔵正四位下佐忠山城守従三位府
左中弁従四位下頼任摂津守正四位上隆経修
理大夫正三位顕季三木従三家保中納言正

二家成大納言正二澄季左京大夫従三位
顕輔六戴正三重家顕昭左衛門督清輔正
四下撰続詞花集宮内卿正三季経正二位
経家正三家衛従三顕家正三位知家大蔵之有
家古今撰者保季正三位家続古今撰者
従二左京大夫行家大蔵卿従二隆博侍従
澄敦
有家

同ト
大蔵卿源行宗卿
孫 基平息小一条院御

詞ナ
前越後守藤原秀通
民部卿宗通息

金詞
侍従大納言藤原成通卿
同弟

チ
紀伊守藤原公重
左衛門督通季息

同
大宮大進藤原清輔
顕輔卿二男

同
従三位右京権大夫源頼政卿
兵庫頭仲正息

同 民部卿中納言藤原成範卿 少納言通憲息

同 大納言源通親卿 久我内大臣雅通息号土御門大納言

同 従三位藤原秀経卿 顕秀卿

同 民部大輔藤原成方 中山中納言顕時息

同 右京権大夫隆信 前長門守為経息

詞 比叡成仲

同 加茂政平

今私曰俗百六十人トアレ此本ニ百五十四人有六人書落歟

参議雅経 刑部卿頼経朝臣男飛鳥井祖歌鞠新古今撰者之内京極師実正二位権大納言忠教刑部卿従三頼輔刑部卿従四下頼経宗長刑部卿従三位蹴鞠雅

波流雅経三木左兵衛督歌鞠従三位飛三位飛鳥井流

皇太后宮大夫俊成 顕輔卿為子時顕広後改テ俊成安元二九十八出家六十三元久元十一卅薨九十一歳去年於和歌処賜九十賀御堂関白道長御堂関白六男長家母高明公女大納言正二位号御子左又二条大納言正二位忠家母近江守高雅女大二條関白為子号小野宮帥権中従三俊忠母大納言経頼女号二条皇大后宮大夫正三位俊成五条三位卜云撰千載集中務少輔従五下定長法名寂連実寿俊成弟俊海子卜云々正二位中納言民部卿新古今新勅撰々者母若狭守親忠女侍従具定母新勅撰如此有女子通具母集二八大略皇太后宮大夫俊成女卜有

権中納言定家 号京極中納言入道定家卿母親忠女美福門院女房伯耆卜云初嫁藤原為経生澄信朝臣正二位民部卿貞永元十一月出家法名明静仁治

二八亦薨八十歳本名光季改季光後改定
家新古今撰者随一也五人之新勅撰々者
記号明月集扁
前有

従二位家隆

前中納言太宰権帥光隆二男
号壬生二位宮内卿新古今撰
者五人之内本名雅高母皇太后宮亮実兼
朝臣女俊卿門弟下云寂連法師聟也利
基子良門孫中納言兼輔形部卿惟正大皇
太后亮為頼讃岐守伊祐因幡守頼成右衛
門佐清経因幡守隆時号猶間中納言清隆
帥中納言土生光隆従二位宮内卿上総家
隆従位
隆祐

女房八十二人

万古 衣通姫
雅淳毛二流皇御子允恭天王后中
臣姫ノ弟也

古後 小野小町
小野當澄女出羽郡司常澄女ト云
或説出羽郡司小野良実女又三光云

院御読當澄ト云云仁明時人
承和比ト云云

小野姉

古 讃岐
安部清行女

同 竉
嵯峨天皇第六御子源大納言定卿女也
或云定卿之母也定生岐帝鍾愛文令挙
淳和天皇御愛天王為御子愛文過処出皇
子文賜寵姫之為母

古 三国町
雅高親王女紀僧正妹云別之三国
町ハ仁明天王更衣名虎女云三条町姉
伊勢物語臣文徳愛仁明大子三条町ハ文
作更衣惟喬親王母栄ハ三国町ハ惟高親
王ノ女ト昔リ
不審也

後 今木
惟明親王御女伊衡朝臣母イ衍衡朝
臣ト云惟明親王千代ニ不入

古後 大輔
但馬守源衡女

後 中將更衣　惟平朝臣女
古後 兵衛　筑前守藤原高經女
後拾 命婦乳母　陽成院御乳母
古 同香掌侍　尼敬信女
古後拾 伊勢　祭主輔親母上東門院女房仍号伊勢
大輔或伊勢守藤原繼蔭女
後拾 中務　中務卿敦慶親王御母伊勢
後 大納言昇卿母女　富小路右大臣藤原顕忠御
拾 本院侍從好色一物云　本院左大臣家女房
後拾 斎院中將　家女房　越前守大江雅致女選子内親王
同々 斎院中務　斎院長官源為理女選子内親王家女房不審

後 四條宰相　明祐法師妹
同 皇太后宮常陸　陸奥守藤原――朝臣女
同 大納言道綱母　東三條入道関白兼家公室
藤原倫寧女本朝古今美人
三人之内也云　云九條右丞相師輔兼家又
号法興院入道号東三条入道関白栗田関
白道兼御堂関白道長儀同三司号帥内大
臣伊周母二位業忠女是儀同三司也後拾
送高内侍ト有左京大夫從三位道雅傳大
納言道綱東宮傳母倫寧女是右大将道綱
母也詞
後拾 高内侍　從二位高階成忠卿女一条院御
代侍同三司母之事也伊周公母中
関白道隆公室系着道綱母下見内大臣正
二位内覧兵杖長徳二十四有事左遷太宰
府同三四五帥京号帥内大臣儀同三司弘
云儀同三司三公準也伊周公初例進大

臣近代ハ是也又惟檝云従一位唐名ヲ
後同三司ト云ヘ各別之事ノ

拾後 **馬内侍** 右馬権頭源時明女上東門院女房
一条院皇后宮女房

後拾詞 **清少納言** 肥後守清原元輔女同宮女房深
養父曽孫為時云

後拾 **紫式部** 越前守為時女上東門院女房或
鷹司殿女房系譜前有中納言兼
輔刑部大輔従五下惟正雅峨江入楚如此
越前守従五下為時母実方公女紫式部母
摂津守従信女宣孝妻大弐三位母一條院
御時源氏物語中紫巻仍号紫式部

拾後拾千金 **赤染衛門** 上東門院女房或鷹司殿女房一
説ニ光孝天皇是忠親王平篤行卞
兼盛栄花物語作者赤染衛門妹中関白密
通之人或大隅守時用女ト云仍号赤染衛
門ト云

拾後拾千云 **小大君** 三条院儲君御時号女蔵人左近ト

後金詞 **出羽弁** 前出羽守平秀仁女同院女房

後拾 **兵衛内侍** 信濃守源隆俊女房

後拾 **盛少将** 蔵人式部丞藤原孝女円融院御乳
女周坊余婦以時婦名盛同院女房

大和宣旨 従二位中納言雅仲卿女大和守
義忠妻仍号大和宣旨ト三條皇
后宮女房

後拾 **土御門御匣** 参議大蔵卿正光女同宮女房

拾後拾金詞千 **和泉式部** 上東門院女房大江雅致女母ハ越
中守保衛女弁内侍ト云母昌子
内親王御乳母和泉守道貞妻仍和泉式部
云一説ニ大弐正二位高遠筑前守従四下
資高女子上東門院女房和泉式部ト号ス母越
中守保衛女右一説有トイヘ圧拾遺尗廿二
云ノ越前守正四位
下大江雅輔女

拾金詞 **小式**
和泉守橘道貞女、母和泉式部、上東門
院女房、橘氏、始左大臣橘諸兄公十一
世孫仲遠道貞
小式部内侍

後拾金詞 **上東門院新宰相**
参議藤原廣業卿女

後拾金詞 **江侍従**
式部大輔大江匡衡女、母赤染衛門

伊勢輔親三位女大輔
上東門院女房

後拾詞 **上東門院中将**
道雅三位女、母山城守藤原
宣孝女

中納言定頼卿母
昭平親王御女

後拾 **大納言経信卿母**
播磨守源国盛女

同 **皇后宮美作**
美作守源実宗女、母出羽弁

後 **左大臣家小輔**
前讃岐守藤原兼房女、母侍従
主殿頭公経女中務小輔為

妻ト仍テ号二〜一ト

後拾 **光朝法師母**
前因幡守橘行平女、陸奥守則
光妻
安治ノ比ノ人、後一条院御時

同々 **井堤尼**

後拾詞金 **周防内侍**
周防守平棟仲女、後朱雀院女房
一本葛原親王八世孫宗仲女ト云
云桓武天皇一ー号式部卿葛原親王大納言
従二位高棟中納言坂大将従三位惟範股
望従四位伊勢守貞材三木親信卿藝守従
四下重義周防守従四位上継仲周防内侍
仲
子

加賀左衛門
加賀守丹波泰親女、後朱雀院
令泉
道綱卿女、後朱雀院御乳母、大江
定経美作守時為妻、仍テ号ス美作三

美作三位
位ト
也

大貮三位 後拾 千

山城守藤原宣孝母紫式部後朱崔院御乳母式部大貮成章為妻仍有此名
内大臣高藤 三条右大臣定方 左大弁左少将従四上朝頼 権中納言正三位為輔 右衛門督正五下宣孝 女好賢子大貮三位 狭衣作者

相模 後拾金詞千

先祖不詳 兵部権大輔大江公資女或妻正説云云 此号相模 入道一品宮女房 本名乙侍従 後泠泉院御時 一説能登守慶滋保胤女ト云云

中宮内侍 後拾

前加賀守藤有家女 同御時

祐子内親王家宣旨 後拾金詞

源頼國女 御時

伊賀少将 後拾金

縫殿頭藤顕長伊賀時女也 仍号伊賀少将 祐子内親王家女房 同御時

小弁 後拾千

越前守藤原懐平女 同内親王家女房

宮紀伊 後拾詞

散位平経方女 母小弁 紀伊守重経妻也 仍号紀伊

弁乳母 後拾詞

加賀守藤順時女 陽明院乳母

中将尼 後拾

右近衛中将源實明女 母筑前守高階成順女 後子内親王家女房

前斎宮筑前乳母 後拾金

二号後子内親王女 成順女 母伊勢大輔 後三条院儲君御時女房

同斎宮河内 千

由梨花云云 永縁僧正孫

伯母 後拾金千

康資母云 云后宮女房云云 筑前母同
又一販大皇 不審太后宮女房三條院儲御

前斎院六条 金

時女房

同斎院尾張 金詞

蓁昌女

少将内侍 後拾金

前能登守藤原實方母輔親女 白川院女房

金詞 三條大宮攝津 堀河院ノ御肱
常陸介藤ノ実宗ノ女肥後ノ守時時
為妻仍号肥後

詞千 同大宮肥後

詞千 待賢門院堀河
神祇伯顕仲ノ女村上ノ七ノ
皇子後中書王具平親王
能書土御門右大臣師房六条ノ右大臣顕房
神祇伯従三顕仲堀河待賢門院ノ女房待賢
門院ハ鳥羽ノ院ノ后崇徳後白河二代ノ母后大
納言公実ノ女白河院ノ御猶子ト云 云 顕仲卿男
女ノ子七人撰集ニ入ルト云 云 中房有房忠房待賢
門院安藝此堀河也猶可勘此内此ノ堀河別
哥人也 云云

金千 上西門院兵衛 堀河ノ妹
兵庫ノ頭仲正ノ女或ノ正三位頼
政ノ二女ト云云二条院後白河
?ノ一ノ皇子清和天皇貞純親王六孫王経基
多田ノ新発意満仲正四位摂津ノ守頼光多田

金 上西門院讃岐

金千 攝政家三河 讃岐ノ妹
三河ノ守頼綱兵庫ノ頭仲正右京ノ大夫大府ノ守
誰頼政伊豆ノ守仲綱女子二条院讃岐頼行
女夏秋門
院ノ冊後

續詞 北政所新少將
俊頼朝臣ノ女

金 花園左大臣家越後
越後守秀綱女

金千 同左大臣家小大進
成清法印ノ母

千 大宮小侍従
光清法印ノ母 々ハ北ノ大進

千 二條院讃岐
頼政卿ノ女

同 参河内侍
為斎ノ女

同 女御殿大貳
俊成卿ノ女

同
大輔 殷冨門院女房号于首大輔殷冨門院
後白河第一皇女右二有高藤公細代
孫為輔中納言誠孝左大弁頼明三木悪輔
従五位上陸奥守朝悪行悪従五位上本名
說輔信成女子殷冨門院播广女子同院大輔

賀茂女 陰陽頭賀保憲女

祝緒 賀茂神主重助女

江口白女 古今作者

遊女宮木 後拾遺作者

檜垣 後撰作者

傀儡名曳 詞花作者

今三人書入

皇嘉門院別當 源俊隆女皇嘉門院法性寺関白女母大納言宗通女崇徳院后近衛院准母別當掛司識也貝平親王土御門師房蔵卿正四下師澄母少将俊信女大納言正師忠日右大臣頼宗女大皇大后宮亮俊澄母大蔵卿為房女女子皇嘉門院別當也

右近 右近少将藤季縄女此季縄号交野少将

式子内親王 後白河第三皇女斎院准三宮母従三位成子大納言季成女萱斎院申鳥羽第四王子後白河院殷冨門院第一皇女母従三位成子式子内親王大炊御門斎院又萱高倉院第三宮在位十二年母建春門院亮子二条院第一宮在位七年母右大臣經宗女高倉院第一宮安徳天皇清盛公女第四宮後鳥羽院在位十五年母贈左大臣信隆女承久配流隠岐後鳥羽院第一宮土御門院在位十二年承久配流土

佐ノ母ハ内大臣通親ノ女ニ二ノ宮在位十一範季
順花院兼久郎流佐渡国母贈左大臣範季ノ
女也

僧七十四人

拾遺 達磨和尚
天竺ノ相代飢人ニ献ス聖徳太子返哥
用明天皇ノ御時也

聖武 兼謙 菩提僧正
大安寺南天竺伽羅国ノ人天平勝宝
三年来テ任ス此国ニ姓ハ波羅門鎮仍号ス

波羅門僧正

同御宇 行基菩薩
大僧正南都薬師寺俗名高志氏
和泉国大鳥郡ノ人

嵯峨 淳和 徳一大師
東寺恵美大臣仲麿息

平城 嵯峨 傳教大師
阿闍梨天台宗祖師俗姓ハ三津氏
近江国滋賀郡ノ人諱ハ最澄

同御宇 弘法大師
贈大僧正真言宗高祖俗姓ハ佐
伯氏讃岐国多度郡ノ人諱空海

仁明 慈覚大師
贈法印大和尚俗姓ハ天部氏下野ノ
国都賀郡ノ人諱円澄

知證大師
十禅師内供奉権少僧都俗姓ハ讃
岐蘭阿闍梨人諱云

古今 後撰 拾遺 花山僧正
俗名良岑宗貞号花山僧又号良
僧正ト慈覚大師ノ弟子桓武天皇平
城天王嵯峨天王淳和天王仁明天王正三
位大納言良峯冬嗣公同母右大将安世宗
貞寛平二年正十九日滅七十六才任良因
院仍贈良因朝臣俗名秀利在中弁正四位
下頭左中将安世八男法名遍昭素性雲林
由信

同々 醍醐僧正
聖宝東大寺別当長者法務光仁
天王ノ御胤

後拾 禅林寺僧正
深覚東寺長者九條右大臣御息

後拾 金詞 千 梨本僧正
明快天台座主文章生藤俊宗息
伊勢守祐之孫

同 木幡権僧正
静円前二条関白ノ御子母ハ小式部
内侍

金詞千 一乗房大僧正　仁覚天台座主土御門院右大臣息母御堂御女

同々々 平等院大僧正　行高御子宰相基平息小一條院御孫三井寺円満院祖師天台座主法務三条院寛平元辞東宮小一条院三木従三位源基平号御子宰相行尊鳥羽白河院権持僧

千 花林院権僧正　永縁興福寺別当式部大輔藤永資息

同 櫻井大僧正　行慶円城寺長吏白河院御子母ハ備中守政長女

同 長谷大僧正　覚忠法性寺大殿御息

後拾 教円法師　前伊勢守

同々 清成法師　八幡宮検校法印元命息

玄賓大僧都　興福寺河内国人

親教大僧都　公忠弁息光孝天王曽孫

詞 隆円大僧都　中関白御息母ハ馬内侍

詞 清胤僧都　参議大江朝綱息

金 玄円僧都　中納言経家卿息定頼卿孫

詞 覚雅僧都　六条右大臣息

後拾 源賢法眼　前摂津守源満仲息

後 真清律師

後 長済律師　讃岐藤家宗息

後拾金千 慶暹律師　輔親卿養子祭主神祇大副大中臣元方孫

金 實源律師　肥後国人

同 静眼法橋 成忠卿息
後拾金 忠命法橋 慈覚房紀伊入道素意息
金 宗延擬講
勝超已講 香雲房
後拾金千 道命阿闍梨 傅大納言道綱卿息天王寺別当
金千 隆源阿闍梨 若狭守藤通宗息
十 顕昭阿闍梨 顕輔猶子元延暦寺移住仁和寺
金千 静厳得業 号興福寺堅得業
詞 隆縁竪者 伯耆守隆忠息母若狭守通宗女
後拾金千 慶範供奉 祐京亮生尸致行息大内記致時孫

後拾 聖梵入寺 元延暦寺移住東大寺
同 浄蔵貴所 善宰相清行息定額
拾詞 戒秀定額 肥後守清原元輔息花山院上法師
拾千 空也上人 六波羅蜜寺本願延喜御子云
増賀上人 参議恒平息右近少将敏行
性空上人 号書写上人従四位下相善卿息
日円上人 入唐於天台国清寺入滅云
日蔵上人 金峯山善宰相清行弟云
玄範上人 津守国基同時人
良忍上人 号大原滝聖尾張国人

金千 瞻西上人 雲居寺本願僧和哥

後 會坂蝉丸 仁明ノ時之道人也常ニ不剃髪世人号ス翁ト或ハ仙人トモ
一兼議左大弁橘桒良丸ノ子ト云
一本刑部卿名虎朝臣ノ息ト云

古 宇治山喜撰
共ニ奴テ非ス也云
郡ノ人也
御室戸ニ有リ
人アリ和
人ト云又
別人ト云云
系図ニ無所見一説山城国ノ訓
是又不知ト云宇治山後ニ遺跡
作和哥式称名院御読基泉ト云
哥式作同人歟ト云云一説基泉同

後 山田法師 有家集

古 兼藝法師 伊勢ノ掾古之息

同 兼均法師 和泉大掾ノ子

後 運仲法師 佐渡ノ守為信息良岑宗貞ノ末葉 角堂ノ別当

六

拾 膳観法師 公忠弁ノ息

同 寛祐法師 同ノ弟

後 兼慶法師 寛和ノ比ノ人 有リ家集

後拾詞 恵慶法師 寛和ノ比ノ人 有ニ家集 先祖不詳

後 円松法師 寛和ノ比ノ人

後拾詞 増基法師 家集ニ号ス廬主ト 宇多御時ニ有リ同名ノ亭子院殿上ノ法師

後拾 九慶法師 對馬ノ守源ノ義親ノ息

後撰金 永成法師 越前ノ守源ノ孝道ノ孫

後拾 壞圓法師 筑前ノ守源ノ道済ノ孫

後拾詞 良暹法師 佑少聞 祇園ノ別当

後拾 永胤法師 右馬助藤栄光息

永源法師 肥後守都舒息 家集

源縁法師 通宗朝臣同時

詞十 俊恵法師 俊頼朝臣子 経信孫

千 登蓮法師

私曰是ヨリ法師入道七人入内十一人僧正

素性法師 俗名玄利 系図見遍昭下 古伝曰俗名僧時 云 官左近将監 或抄清和殿上人 云 御時任律師 云 寛平

能因法師 俗名永愷 道肥後守元愷子 云 守 云 号古曽部入道 能因周防 田 九 常主安吉雄記樹 純 云 行播 嘉諳 弟 元 良 信

良暹法師 父祖不詳 祇園別当 住大原 一説 実方朝臣家女房白菊 云 ト 云

道因法師 権中納言為輔 高藤公四世孫 従五位下惟孝 駿河守大蔵正五位下 右 位下惟孝 敦輔 治部丞清孝 従五位下 左 馬助 従四位下 敦頼 道因法師

西行法師 俗名義清 或則清 憲清 藤原康清 子 又 泰清 鳥羽院北面 下 伊賀守 従 四位下 左衛門尉 従五位上 名公 上林雄 俊 藤成 従 四位上 豊沢 秀郷 左衛門 上文 上将軍 千常 将軍 文脩 左 従 衛門尉 従五位 左 衛門尉 秀清 同 康清 右 兵衛督 義清 法名円位 後 改西行

寂蓮法師 俗名定長 中務少輔 入道 俊成 定長 俊海 阿闍梨 俊成卿 猶子 実者 俊海 之子也 明月記 云 建仁二年七月廿日 午時 許 参上 左中弁 入道 少輔 逝去之由 云 未 聞及 欲聞之 即退出 已 依 為 軽服 身也 浮生 無常 雖 不可 驚 今 聞 之 哀傷之思 難 禁 自 切

歌之音久相馴已及数十廻況於和哥道者
傍輩諸人手已以部異逸物也今既泉為道
可恨於是云
可悲云

前大僧正慈圓

本諱道快第六十二代座主
諡号慈鎮号吉水和尚養和
元十一六改名於慈円久壽二乙亥
誕生嘉禄元九廿五入滅七十一歳嘉禎三
三八諡号慈鎮滅後
十三年系図在前

入道三十六人

万拾 **満誓沙弥** 俗名麿従四位笠朝臣仍号元正天皇御時右大弁

万二万沙弥 **寛蓮** 俗橘言俊亭子御時殿上法師

後 **戒善** 俗名兵衛佐助権出家也前常陸貫之 文則為和哥知音云

拾後拾 **安法** 俗名途内匠頭適六男河原院大納言 源昇孫

拾 **大原少将入道舜源** 俗名時叙一條右大臣息

後拾詞 **多武峯少将入道如覚** 俗名高光九條右大臣八男 母中納言朝忠女

參河入道寂昭 俗名大江定基参議斎光息

後拾金詞 **古曽部入道能因** 俗名橘永愷長門守元愷息 作玄々集

後 **藏人入道毅覚** 俗名藤信綱右少弁定成息

丹後入道信房 俗名後平册後守従四位上 前尾張守高階順息

武藏入道覞心 俗名隆資越前守安藝孫 出雲守如女

後 **大原入道念首** 作打聞

紀伊入道素意 俗名重行越前守藤懐君息

金詞 **前和泉守入道蓮寂** 俗名道経讃岐守顕綱息

千 刑部少輔入道素覚　俗名ハ家基 伯耆守家光ノ子 修理大夫俊経ノ孫

同 前長門入道寂超　俗名ハ為経 丹後守藤為忠ノ息

同 伊賀大進入道寂念　俗名ハ為業 同ノ息

同 壹岐入道寂然　俗名ハ頼業 同ノ息

金詞 大夫大進覚如　俗名ハ源兼昌 摂津ノ守俊輔ノ息

詞千 宰相入道観蓮　俗名ハ教長 京極大殿ノ孫 民部卿忠教ノ息

千 民部卿三位入道憼　俗名ハ範兼卿 式部少輔能兼ノ息

同 前右馬助入道　俗名ハ敦頼 治部ノ丞清孝ノ息

詞千 前肥前入道西好　俗名ハ為実 前ノ信濃守家実ノ息

千 前左馬助入道西遊　俗名ハ範綱 右衛門ノ大夫永雅ノ息

詞千 式部大夫入道顕西　俗名ハ実重 同ノ大夫平ノ輔[illegible]息

千 神祇少副入道空仁　俗名ハ大中臣清長

同 右兵衛尉入道西行　始ハ円位ト名ク

同 右兵衛入道西住　俗名ハ源季正 有前ニ委シ

同 信従入道静蓮　俗名ハ重義

同 大貳三位入道蓮寂　俗名ハ重家卿 顕輔卿ノ息

千詞 五條三位入道釈阿　俗名ハ俊成 是モ前ニ委シ

千 前右京権大夫入道生蓮　源ノ師光 師頼大納言ノ息 堀河ノ左大臣ノ孫

千 前少納言入道寂恵　俗名ハ資隆 豊前ノ守藤重長息

千 中務少輔入道寂蓮　是モ前ニ委シ

美濃権守入道勝命　俗名ハ親重（チカシゲ）前ノ佐渡守（サドノカミ）親貞ノ息　私ニ曰ク入道ノ道名三十六人ノ内一人ハ不足（タラズ）落（オツル）書歟

くもまよりかゆるひとこゑ物をすれ
すゝ蛍の系嵩をこそなみせはさと
まおかつれし父のそくへきも一色
むよめしらし時鳥よ今しくそ多
それめてし（本ノ二）楷響をも紀しさらめよ